# 日本文法研究

久野　暲　著

# 日本文法研究

久野　暲　著

大修館書店

久野　暲（くのすすむ）

1933年東京生れ。東京大学文学部言語学科で言語学を専攻。1956年に学士号，1958年に修士号を受ける。1960年，フルブライト研究員として渡米，ハーバード大学で数理言語学を研究。1963年同大学言語学科博士課程に入り，1964年博士号を受ける。現在，同大学言語学科主任教授。著書に *The Structure of the Japanese Language* (The MIT Press, Cambridge, Mass., 1973) がある。

日本文法研究

© S. KUNO 1973

1973年6月20日　初版発行　　¥2,000
1979年5月15日　6版発行

著者との協定により検印を廃止する

著者　久野　暲
発行者　鈴木敏夫

発行所　株式会社　大修館書店

[101]　東京都千代田区神田錦町 3-24
電話(03)294-2221(大代表)　振替東京9-40504

印刷／文唱堂　製本／牧製本　　装幀／丸山道彦

# はしがき

本書は，伝統的な文法で全く無視されているか，誤まった取り扱いを受けている日本語の構文パタンをいくつか選んで変換文法理論の観点から，言語学的考察を与えたものである。分析の結果は，変換文法理論は言うに及ばず，言語学一般に精通していない読者にも理解していただけるよう，できる限りフォーマルな規則化を避け，解り易い表現で提出してある。

人間の生理学的構造を知るためには，病人がどうして病気であるかを調べることが，健康人がどうして健康であるかを調べることと同じ位重要である。それと同じように，言語の構造の本質を知るためには，非文法的な文がどうして非文法的なのかを調べることが，文法的な文がどうして文法的であるのかを調べることと同じ位重要である。伝統的文法は，与えられた文がどうして文法的であるかは説明してくれるが，与えられた文がどうして非文法的であるかは，全く説明してくれないと言ってよい。本書では，文法的な文と同じ位非文法的な文を引用して，後者の非文法性の原因を究明することに努めた。その意味で，本書は，『非文法的な文の文法』と呼ぶことができよう。

例えば，（1 b），（2 a）が，指定された意味で非文法的（*は例文が非文法的であることを表わす）なのは何故か。

（1） a．太郎ハ花子ヲ自分（＝太郎）ノ家デ殺シタ。
　　 b．*太郎ハ花子ヲ自分（＝花子）ノ家デ殺シタ。
（2） a．*花子ハ太郎ニ自分（＝太郎）ノ家デ殺サレタ。
　　 b．花子ハ太郎ニ自分（＝花子）ノ家デ殺サレタ。

他方，（3 a）も（3 b）も文法的なのは何故か。

（3） a．太郎ハ花子ニ自分（＝太郎）ノ家デ勉強サセタ。
　　 b．太郎ハ花子ニ自分（＝花子）ノ家デ勉強サセタ。

また受身文（２ａ）が非文法的であるにも拘らず，受身文（４ａ）が文法的なのは何故か。

（４） ａ．花子ハ太郎ニ自分（＝太郎）ノ家族ノ話バカリサレタ。
ｂ．花子ハ太郎ニ自分（＝花子）ノ家族ノ話バカリサレタ。

上の「自分」の解釈に関する質問は，本書が解答を与えんとする問題の典型的な例である。

本書のもう一つの特徴は，日本語をでき得る限り，一般言語学的視野から考察していることである。特に，英語に重点をおいて，日本語の特徴と，それに対応する英語の特徴が，どのような点で共通であり，どのような点で違っているかを指摘してある。日本語の或る特徴を支配している原則が，英語の思いがけないような特徴をも支配している様な場合，日英両語文法の比較は，極めて興味深いものとなる。例えば，

（５） ａ．太郎ハ花子ガ自分（＝太郎）ヲカバッテクレタコトヲ感謝シテイル。
ｂ．*太郎ハ花子ガ自分（＝太郎）ヲカバッテヤッタコトヲ感謝シテイル。

に見られるような，従属文にあらわれる「自分」の用法（（ａ）は文法的であるが（ｂ）は非文法的である）を支配している原則が，英語の代名詞の用法の一部をも支配していること，また「ハ」と「ガ」の用法の区別を支配している原則が，英語の代名詞の用法の大部分を支配していることなどは，その例である。このような意味で，本書のいくつかの章は，『日英比較文法』――しかも，表面的な比較ではなく，一般に人が気がつかないような深い比較を行なった文法――と呼ぶことができると思う。

本書に発表されている私の日本語研究は，一部，アメリカ合衆国の National Science Foundation からの研究費（Grant Nos. GS-1934, GS-2858）によって行なわれた。同 Foundation, 特に，社会科学部門担当の Murray Aborn 氏に感謝の意を表したい。また，本書後半の執筆は，私が Harvard 大学から一年間休暇を取り，IBM の Thomas J. Watson Research Center, Yorktown Heights, New York に滞在中行なわれたものである。同研究所の数理科学部門の Shmuel Winograd, Alan J. Hoffman, Warren J. Plath 氏に感謝の意を表したい。

本書は，先にMIT Press, Cambridge, Massachusetts から出版された

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

拙著, *The Structure of the Japanese Language* (1972) の日本語版である。同書から，3章 (Chapter 9 "Giving and Receiving Verb", Chapter 25 "The Reflexive Pronoun and the Passive and Causative Constructions", Chapter 27 "Case Marking in Japanese") を削除し，新しく4章（第25-28章）を加えた。英語の話し手に必要な説明と，日本語の話し手に必要な説明とでは，当然違いがでて来る。両書に共通な章も，本書では日本人読者を対象として，始めから書き直した。本書が上掲英語版の翻訳ではないことを強調しておきたい。

本書の第3，4，11, 12, 13, 18, 22, 23章は，すでに，服部四郎，R. ヤコブソン共編『言語の科学』（東京言語研究所）第2，3号に発表した拙著論文「日本文法ノート」§§ 2～9に少し手を加えたものである。同論文の本書転載に心よく同意して下さった服部四郎氏に感謝の意を表わしたい。

本書に発表されている研究内容については，Sheila Duncan, John Jaig, Frederick Damerau, Trylla Escherick, Akira Mikami, Sigeyuki Kuroda, Mineko Masamune, Kazue Campbell, James McCawley, Noriko Akatsuka, Jane Robinson, David Perlmutter, Adrian Akmajan, Bruce Fraser, John R. Ross, Karl V. Teeter, Paul Postal, Masatake Muraki, Masayoshi Shibatani, Emmon Bach, Charles Fillmore, その他数多くの方々から有益な批評提案をいただいた。

最後に，本書の原稿の修正，清書を引き受けて下さった小池裕子嬢に感謝の意を表したい。

昭和47年8月1日

久野　暲

# 目　　次

はしがき…… i

I．序…… 1
第1章　日本語の特徴…… 3
——語順を中心として——

II. 助　詞……25
第2章　「ハ」と「ガ」(その一)……27
——主題・対照・総記・叙述——
第3章　「ハ」と「ガ」(その二)……36
——主語化——
第4章　目的格を表わす「ガ」……48
第5章　「ヲ」,「ニ」と「デ」……58
第6章　「ト会ウ」と「ニ会ウ」……61
第7章　「マデ」,「マデニ」と「マデデ」……65
第8章　並列助詞「ト・ニ・ヤ」……68

III. 動　詞……77
第9章　状態性と自制性……79

IV. 副詞節……91
第10章　「ウチニ」と「マエニ」……93
第11章　「テカラ」,「アトデ」,「アトニ」と「アト」……96
第12章　「ナラ」…… 102

第13章 「タラ」…… 109
第14章 時を表わす「ト」…… 114
第15章 「シ」形接続と「シテ」形接続 …… 122
第16章 従属節の従属度…… 126

V. 名詞節・形容詞節…… 135
第17章 「コト」,「ノ」と「ト」…… 137
第18章 「ノデス」…… 143
第19章 日・英両語の関係節の比較…… 150
第20章 関係節と主題…… 158
第21章 関係節のテンス…… 171

VI. 文脈の分析…… 177
第22章 「ハイ」と「イイエ」…… 179
第23章 「コ・ソ・ア」…… 185
第24章 再帰代名詞「自分」…… 191
第25章 「ハ」と「ガ」(その三) …… 207
——新しいインフォーメイションと古いインフォーメイション——
第26章 「ハ」と「ガ」(その四)…… 219
——文脈省略——
第27章 英語の「ハ」と「ガ」(その一)…… 237
——主題・対照・総記・中立叙述——
第28章 英語の「ハ」と「ガ」(その二)…… 243
——代名詞の用法——

VII. 語 順 …… 263
第29章 存在文の語順 (その一) …… 265
——日本語の存在文——
第30章 存在文の語順 (その二) …… 281
——英語の存在文——

# I. 序

# 第1章　日本語の特徴

## ——語順を中心として——

日本語を性格づける最も重要な特徴の1つは，それがSOV語[1]，すなわち，目的語（O）が動詞（V）の前に現われる言語であるということであろう。この点で，日本語は，SVO 語（すなわち目的語が動詞の後に現われる言語）である英語，フランス語，ドイツ語[2]，中国語，フィン語などと著しい対照を示している。SOV 語は，日本語の他に，ペルシャ語，ヒンディー語，タミール語，朝鮮語，アイヌ語，チベット語，ビルマ語，トルコ語，バスク語，など世界に数多くあるが，日本語はその中でも，終助詞以外のいかなる要素も動詞の後に現われ得ないという点で，絶対的な SOV 語であると言うことができる。例えば，

（1）　a．太郎ハ（S）　本ヲ（O）　読ンダ（V）。

　　b．*太郎ハ（S）　読ンダ（V）　本ヲ（O）。

において，（1 b）は非文法的である。[3] 他方，同じく SOV 語であると言われているペルシャ語やトルコ語においては，（1 a）のパタンが最も普通な語順ではあるが，（1 b）のパタンも文法的なのである。

本章では，SOV 語であることに由来する，あるいはそれに関連があると思われる日本語の特徴を中心として，不断，我々が気がつかないような日本語の特殊性を論じることにする。

### A. 日本語は後置詞的言語である

日本語には，前置詞や節の初頭に現われる接続詞がない。名詞の格は，助詞と呼ばれる後置詞によって表わされ，従属節は，節尾に現われる助詞や，従属節の主動詞（やはり節尾に現われる）に付加される接尾辞，ある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

いは，「時（ニ），処（ニ）」などの形式名詞によってマークされる。次の例を参照されたい。

（2） a. John went *to* Kobe *by* car *with* Mary.［前置詞］
b. John ハ車デ Mary ト神戸ニ行ッタ。［助詞］

（3） a. *If* John can, he will do it.［節頭接続詞］
b. John ガデキレバ，彼ガソレヲスルデショウ。［動詞接尾辞］

（4） a. *When* John got to school, Mary was already there.［節頭接続詞］
b. John ガ学校ニ着クト，Mary ガモウ来テイタ。［助詞］

（5） a. *When* John was born, Mary was two years old.［節頭接続詞］
b. John ガ生マレタ時，Mary ハ2才デシタ。［形式名詞］

英語の並列接続詞 *and* は，その後に来る要素と続けて発音されるが，日本語の並列接続助詞は，その前に来る要素と続けて発音される。

（6） a. John *and*-Mary
b. *John-*and* Mary

（7） a. John is stupid *and*-slow.
b. *John is stupid-*and* slow.

（8） a. *太郎 ト花子
b. 太郎ト 花子

（9） a. *John ハバカダ シノロマダ。
b. John ハバカダシ ノロマダ。

上記の，日本語の後置詞性は，日本語が SOV 語であることと何か深い関連があるに違いない。Greenberg[4] は，世界の言語にあてはまる普遍的特徴として，SOV を正常の語順とする言語の大部分が後置詞的であると観察している。

**B. 日本語は，「左枝分れ」的言語である**

日本語の形容詞，関係代名詞節は，その「先行詞」の前に現われる。例えば，

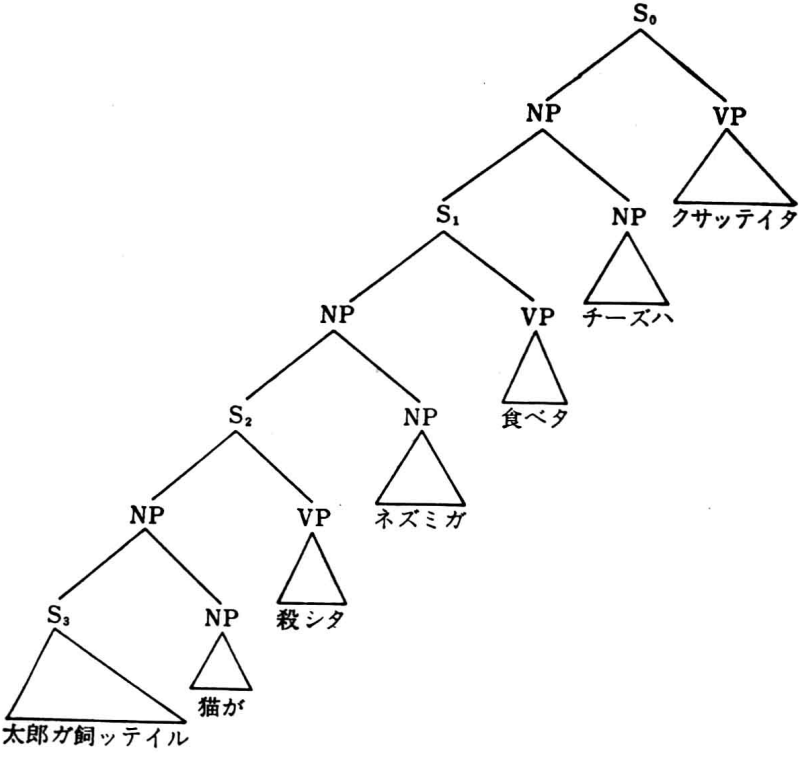
(10)　a．太郎ノ妹ガ死ンダ。
　　b．太郎ガオモシロイ本ヲ書イタ。
　　c．太郎ハ花子ガ書イタ本ヲ読ンダ。

日本語のこの特性が，日本語を「左枝分れ」(left-branching) 的言語としている。ここで言う「左枝分れ」の意味は，次の例を見れば明らかになるのであろう。

(11)　[[[太郎ガ飼ッテイル]$S_3$猫ガ殺シタ]$S_2$ネズミガ食ベタ]$S_1$チーズハ　クサッテイタ。

(11)は，文法的な，しかも意味が通じる文である。この文は，次のような構造を持っているものと思われる。

(12)




上の構造図で，Sは文または節，[5] NP は名詞句 (Noun Phrase)，VP

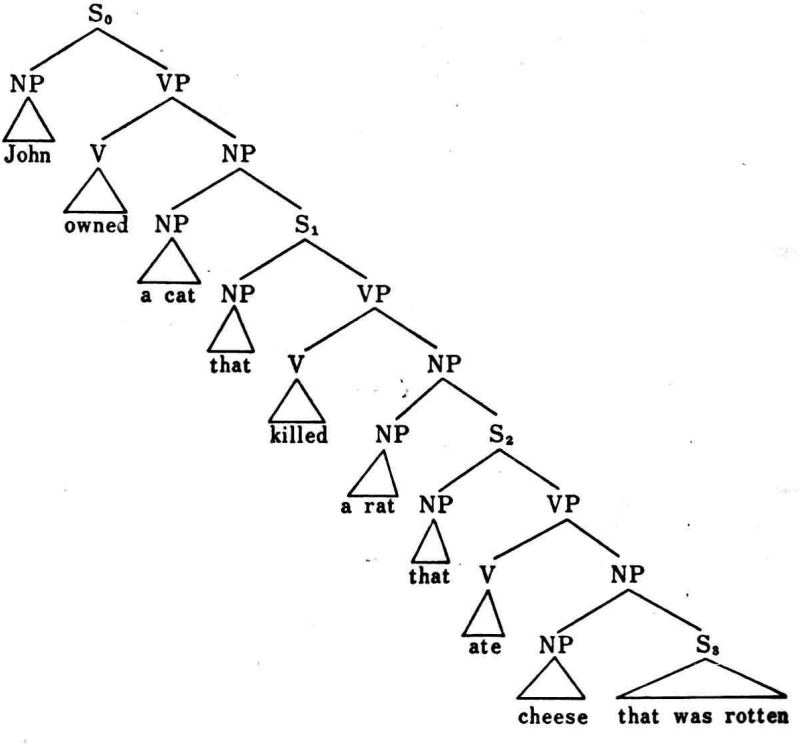
は述部（Verb Phrase）を表わす。主文 $S_0$は$S_1$という従属節（関係節）を含み，$S_1$は $S_2$という従属節を含み，$S_2$ 自体は $S_3$ という従属節を含んでいる。$S_0$—$S_1$—$S_2$—$S_3$ が構造図上，左に左にと枝分かれして伸びていることに注意されたい。このような左の方向への枝分かれを，「左枝分れ」（left-branching）と呼ぶのである。

他方，英語は，基本的には，「右枝分れ」の言語である。例えば，

(13) John owned a cat that killed a rat that ate cheese that was rotten.

は，極めて自然な理解度の高い文であるが，この文は，次のような構造を持っているものと思われる。

(14)




上の構造図で，$S_0$—$S_1$—$S_2$—$S_3$ が右へ右へと枝分かれしていることに注

意されたい。

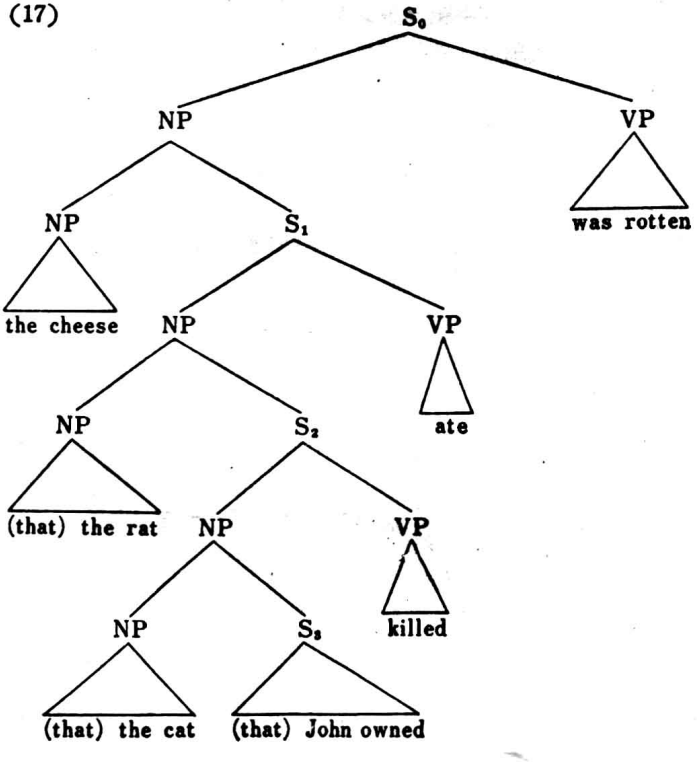
極めて自然な，理解度の高い日本文である（11）を英語に直訳すると，ほとんど理解度ゼロの文が生じる。

(15) *The cheese that the rat that the cat that John owned killed ate was rotten.

(11)，(13)の意味を把握するのに何ら障害がなく，(15)の意味を把握するのに，紙と鉛筆が必要なのはなぜであろうか。これは(15)が，(11)も(13)も持っていない特徴，すなわち，自包（self-embedding）性を持っていることに起因する。範疇Aに属する構造の前後にB，Cが現われ，BAC自体も範疇Aに属する場合，範疇Aは自包的（self-embedding）であると言われる。例えば，範疇S（文）は次の例において自包的である。

(16) 太郎ガ　花子ガ書イタ　本ヲ読ンダ。
[ B　S　C ]s

(17)



すなわち，(16)の「花子ガ書イタ」はS（文）であり，このSが「花子ガ」という，Bに対応する部分と，「本ヲ読ンダ」という，Cに対応する部分とで前後を囲まれ，BSC，すなわち(16)全体，というやはり範疇S（文）に属する構造を形成しているからである。さて，問題の(15)は，(17)のような構造を持っているものと思われる。

(17)の構造図の中で，$S_3$（すなわち *John owned*）は，（*that*）*the cat* と *killed* とにはさまれて$S_2$の中に内包され，$S_2$（すなわち（*that*）*the cat that John owned killed*）自体は（*that*）*the rat* と *ate* とにはさまれて$S_1$の中に内包され，$S_1$自体は，この文全体の中に内包されている訳である。文の理解度を低めるのは，「左枝分れ」的構造でも，「右枝分れ」的構造でもなく「自包」的構造なのである。[6]

(17)に見られるような「自包」的構造は，英語に固有で，日本語に存在しない訳ではない。次の例を参照されたい。

(18) a．太郎ガ手紙ヲ読ンダ。
b．太郎ガ［花子ガソノ少年ニ書イタ］手紙ヲ読ンダ。
c．*太郎ガ［花子ガ［夏子ガ愛シテイル］ソノ少年ニ書イタ］手紙ヲ読ンダ。
d．*太郎ガ［花子ガ［夏子ガ［両親ガ反対シテイルニモカカワラズ］愛シテイル］ソノ少年ニ書イタ］手紙ヲ読ンダ。

(18d)は，英語の(15)と同じ位，理解することが困難である。他方，(18d)の英語訳

(19) John read a letter that Mary had written to the boy that Jane loved in spite of the fact that her parents objected to it.

は，理解度が極めて高い。

以上の観察から明らかなことは，

(11) 太郎ガ飼ッテイル猫ガ殺シタネズミガ食ベタチーズハクサッテイタ。

と，それに対応する英文

(15) *The cheese that the rat that the cat that John owned killed ate was rotten.

を比較して，日本語が何か英語にない特性を持っているかの如く考えるの

は間違いであるということである。(18) と(19) では，(11) と(15) の逆の関係，すなわち，英語の文が理解度が高く，それに対応する日本文が理解困難という関係が認められるからである。これらの文が示しているのは (i) 文の理解度を低めるのは，日本語においても，英語においても，「自包」(self-embedding) 性であり，(ii) 関係（代名詞）節が日本語では先行詞の左に，英語では右に現われる（すなわち日本語が「左枝分れ」的言語，英語が「右枝分れ」的言語である）ことに起因して，両言語で，異なった処に「自包」的構造が現われているということである。

**C. 日本語の動詞省略は，逆向きに作用する**

英語には，並列文の中の動詞の最初のもののみを残して，残りの全てを省略するプロセスがある。[7]

(20) a. John *hit* Mary, Bill *hit* Jane, and Tom *hit* Martha.
b. John *hit* Mary, Bill $\phi$ Jane, and Tom $\phi$ Martha.
c. *John $\phi$ Mary, Bill $\phi$ Jane, and Tom *hit* Martha.

上例中，$\phi$ は，省略された動詞が非省略文で占めていた位置を表わす。(20 b) のパタンを指すのに SVO, SO パタンという表現を用いることとする。英語以外のSVO語も前向きの動詞省略パタン，すなわち SVO, SO パタンを示す。例えば，フランス語では

(21) a. John *a frappé* Mary, Bill *a frappé* Jane, et Tom *a frappé* Martha.
b. John *a frappé* Mary, Bill $\phi$ Jane, et Tom Martha.
c. *John $\phi$ Mary, Bill $\phi$ Jane, et Tom *a frappé* Martha.

ところが日本語では，前向きの動詞省略は不可能で，逆向きのパタン，すなわち SO, SOV が現われる。

(22) a. 太郎ガ花子ヲブチ，二郎ガ夏子ヲブチ，三郎ガ秋子ヲブッタ。
b. *太郎が花子ヲ{ブチ, ブッタ，ソシテ}二郎ガ夏子ヲ $\phi$，三郎ガ秋子ヲ $\phi$。
c. 太郎ガ花子ヲ $\phi$，二郎ガ夏子ヲ $\phi$，三郎ガ秋子ヲブッタ。

(22 c) のパタンは，一見，極めて特異なものに思われるかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook